

「計算のつまずき」の原因は…

冬休みが近づき、子供たちは今、授業で2学期のまとめに取り組んでいます。2学期は、1学期よりも学習内容が難しくなり、学習範囲も広がりました。これまでに学んだことをしっかりと定着させ、3学期につなげていきたいと考えています。日頃の積み重ねが力になる時期でもありますので、御家庭でも復習の様子を温かく見守っていただければ幸いです。

さて、最近、子供たちの「計算のつまずき」について、職員室でも話題になることがあります。暗算で解こうとして計算があいまいになったり、筆算を急いで書いてしまったりすることで、正しく解けない場合が少なくありません。丁寧に解けばできるのに、もったいないミスが続くこともあります。

心理学者で認知科学と言語科学の専門家である今井むつみさんは、著書『学力喪失——認知科学による回復への道筋』（岩波新書）の中で、子供たちのつまずきの要因として「数・読解・思考」の3つを挙げています。このうち「思考のつまずき」は、計算にも深く関わっています。

私たちの脳は、一度に多くのことを処理するのが得意ではありません。処理する情報が多くすぎると、考える力が追いつかず、思考が止まってしまうことがあります。机の上に物があふれて、ノートを広げるスペースがない状態を想像していただくと分かりやすいかもしれません。これでは落ち着いて考えることができません。

筆算をせずに暗算で済ませようとする子供たちは、まさにこの状態です。頭の中で、答えを覚えておくことに脳の力が使われてしまい、本来の計算に集中できないのです。暗算の方が「手軽で楽」に見えて、実は脳に大きな負荷がかかっています。逆に、筆算として紙に書き出すだけで、脳の負担が減り、考えるスピードも上がります。

「紙に書くこと」は、計算ミスを防ぐだけでなく、子供たちの思考を助ける大切な手段です。また、ていねいに書くことは、思考の整理と記憶の定着にもつながります。今後も、計算の基礎を大切にしながら、子供たちの力をしっかりと育んでいきたいと考えています。冬休み中の宿題や、3学期の家庭学習の際にも、ぜひ紙に書く習慣を励ましていただければと思います。

それでは、よい新年をお迎えください。

